

職人の技

シリーズ 37 〈友禅染〉

上原利丸 さん

「過去の自分の作品を見る良さはありますね。出来の良し悪しはともかく、エネルギーがある。やりたいことはあるけれど表現方法も技法も分らない時代。だからこそ、前向きなエネルギーにあふれています」。友禅の伝統を守るために。上原さんの覚悟は、前に進むこと。

友禅は、布に模様を染める、日本の伝統的技法。定説的には江戸時代の扇絵師である宮崎友禅斎からその名が付けられたとされているが、染物自体は、それ以前から脈々と受け継がれてきていた。友禅が画期的だったのは、「細い筒から糊を生地に置き土手を作り、染料の染みを止めることで、色を塗り分ける」こと。「従来よりも多彩で緻密な

表現ができるようになった。進路に迷っている学生時代、僕が最後に友禅に引かれたのも、フリーハンドでいろいろな色を使って自由に描けることでした」

それまでは、例えば着物であれば、織や刺しゅうが主流。手間も時間もかなり高価なため、公家、大名など限られた階級しか縁のないものだった。それが友禅斎の時代に変わった。

「ファッションが町人文化になって、着る人も作る人も競うようになり、そこでいろいろな図柄が出てきました。それ以前は、染物の図柄は単純。技法も材料もありませんでしたから」

いわば、時代のトップ・デザ

イナーでありモードのクリエイター。上原さんは、「機能性、社会性、芸術性」が三位一体になることで新しい芸術は生まれると言う。着物も友禅も、その時代が求め、その時代の中で輝いた。

「生き生きとしたエネルギーの時代は、面白いものが生まれてくる。室町後期なんかは面白いですよ。信長、秀吉の芸術に対する遊び心とか。逆に、江戸後期になると、景気が良くないこともあり、精神が大らかじゃなくて、ポジティブな方向よりも陰にこもった方向になっていく。しかし、だからこそ江戸小紋のような素晴ら

しく緻密なものも生まれ出てくる。時代をとらえた表現が出てきて、伝統というのはつながっていくんじゃないでしょうか」

友禅といえば、代表的なモチーフは、花鳥風月。伝統を重んじる人からすれば、これは外せない要素かもしれない。「でもね」と上原さんはほほ笑む。

「花鳥風月も当時は、新しいモチーフだったんですよ。縄文時代に花鳥風月なんてなかったんですから（笑）」

上原さんの作品には、地元の大宮公園で遊ぶ子ども、青空には飛行機、さらに携帯電話までモチーフに登場する。

「江戸時代、かんざしだつて謎解きモノが出てきたり、新しい感覚や遊び心がありました。伝統というのは、今、生きていなければ意味がない。死んだら伝承になってしまう」

伝統に縛られ、前例を守るだけならば、花鳥風月のモチーフさえ生まれなかった。

「常にゼロ・スタートの気持ち。新しい表現を目指す。僕のシリーズはちょっと見た目には現代的でポップといわれますが、よく見るとやっぱり日本のだし伝統的。少しでも前と違うものを取り入れていく努力をしないと、伝統の持っている大きさに押されてしまいます」
現在は自身の作品作りだけではなく文星芸術大学美術学部教授として、若い担い手が社会で活躍するための活動も行っ

振り返って気付かされ、
振り切って生み出す。



文=岩瀬 大二
text: Dajji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto



ている。後進への期待は大きい。「文星芸術大学は、染色だけではなく、工芸、絵画、彫刻、CG、アニメーションなど広がりがある。染色の中だけの伝統、見方だけではなく、いろいろな分野から刺激を受けて吸収して、自分なりの表現にして

いつてほしい」
自身も東京芸術大学出身だから共感できる彼らの悩み、苦悩、そして、夢。そのエネルギーが自身の作品にも返ってくる。若い時代の作品にあった情熱もまた、戒めと気合のもと。「経験も技術も、手持ちを

いっぱい持っているから、ついつい使いたくなってしまう。でも、経験を積んだからこそ新しい取り組みとか、見方を変えてみるという努力をしなければ。小手先の隠し味をたくさん入れてまずくなくちやう料理は駄目ですね(笑)」



PROFILE

うえはら・としまる
1955年鹿児島県生まれ。東京芸術大学で友禪を学び、1980年には日本現代工芸美術展、日展初入選。以降、意欲的に個展を展開し、その間、第40回日本現代工芸美術展NHK会長賞、第39回日展特選を受賞するなど、高い評価を受ける。現在は文星芸術大学美術学部教授、東京芸術大学非常勤講師を務め、現代工芸美術家協会本会員、日展会友としても活動。また、さいたま市で「染工房上原」を運営。友禪を一般の方にも広げるサロ、後進の育成などにも力を入れている。